

漢法苞徳塾資料	No. 543
区分	基礎学・五行論
タイトル	五行の循環：旺相死囚休
著者	八木素萌
作成日	2001.06

表 1

	旺	相	死	囚	休
春	肝	心	脾	肺	腎
夏	心	脾	肺	腎	肝
長夏	脾	肺	腎	肝	心
秋	肺	腎	肝	心	脾
冬	腎	肝	心	脾	肺

表 2

	旺	相	死	囚	休
春	木	火	土	金	水
夏	火	土	金	水	木
長夏	土	金	水	木	火
秋	金	水	木	火	土
冬	水	木	火	土	金

表 3

	肝	心	脾	肺	腎
春	旺	相	死	囚	休
夏	休	旺	相	死	囚
長夏	囚	休	旺	相	死
秋	死	囚	休	旺	相
冬	相	死	囚	休	旺

表 4

	旺	相	死	囚	休
肝	春	夏	長夏	秋	冬
心	夏	長夏	秋	冬	春
脾	長夏	秋	冬	春	夏
肺	秋	冬	春	夏	長夏
腎	冬	春	夏	長夏	秋

表 5 五運主運の交替する日

五運順序	五運名称	起運日	止運日	主運日数	気候所主
初	木	大寒節当日始	春分後十三日	七十三日零五刻	風温
二	火	春分後十三日	芒種後十日	七十三日零五刻	火熱
三	土	芒種後十日	処暑後七日	七十三日零五刻	暑湿
四	金	処暑後七日	立冬後四日	七十三日零五刻	涼燥
終	水	立冬後四日	小雪節末日	七十三日零五刻	冷寒

◆一年における季節・五行の循環は「旺・相・死・囚・休」の局面として表現される。これは年間における五蔵の機能の循環でもあり、同時に外邪の五行の循環でもある。四季において「土用」は立春・立夏・立秋・立冬の前の18日間であり、それぞれに脾は旺気するとみる説も一理ある。しかし、一年の循環においては、この表のような局面が主要なものである。「長夏」は芒種後十日から処暑後七日までの、「暑湿」の時気に当たるとされている。

※ 五蔵の機能の循環は、主に背腧穴に良く現れる。

※ 外邪の循環を軸に一年を六氣に分ける説もある。しかし、この場合でも五蔵の循環は五氣に分けたまま、六氣説とのズレとカサナリを考慮して勘案するのが妥当と考えられる。

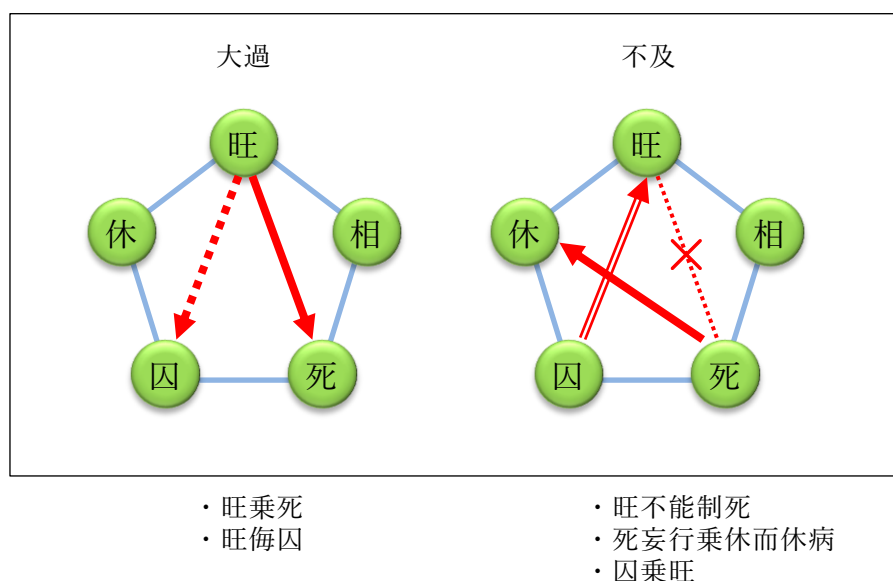
木	火	土	金	水
肝	心	脾	肺	腎
風	熱	湿	燥	寒

風	熱	暑	湿	燥	寒
木	君火	相火	土	金	水

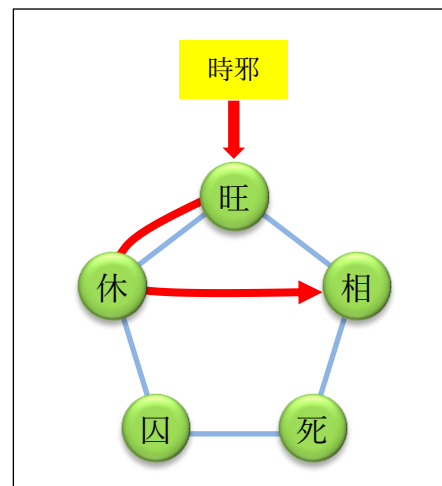
◆「旺」期にある蔵は、時気（季節の気）の養いを受けて働くべき時にある。しかし、時気の不及による養いの不足、先天・内傷などの因による虚、などがあれば旺気不足し、邪を受けやすい状況に陥る。逆に時気が大過で、盛んになり過ぎた場合は「死」期・「囚」期の蔵に影響（相乗・相侮）を及ぼすことになる。

大過の場合……旺乗死・旺侮囚

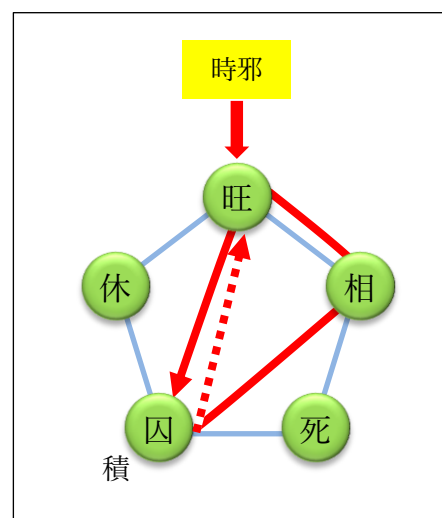
不及の場合……旺不能制死・死妄行乗休而休病・囚乗旺



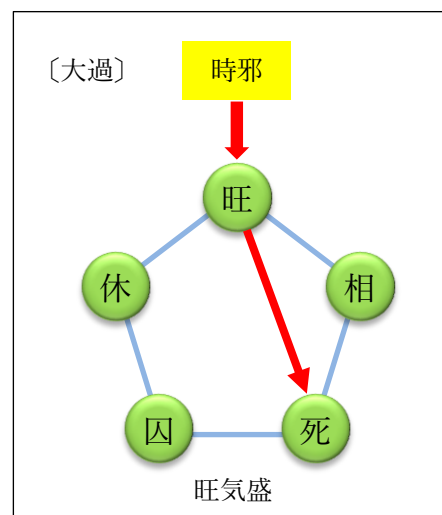
- ◆「相」期にある蔵は、「旺」に続いて次の季節に旺ずるものであるが、自身にとって「賊邪」の位置にある「休」期にある蔵に、最も影響される位置にある。ただし、「休」期にある蔵は、子に背かれて虚になっていることが多く、その制剋力は弱い。しかし「休」期にある蔵は邪を受けやすい状況にあり、それが邪実になった時には、一番に影響を受けることになる。



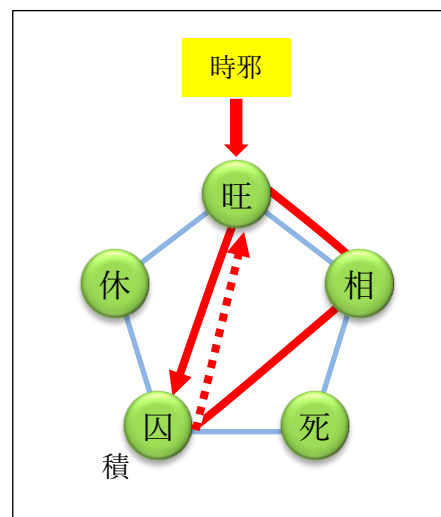
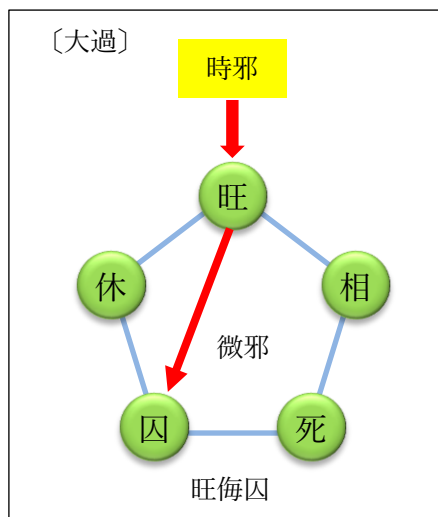
また、「相」期にある蔵が、先天・内傷の因による虚の為に邪を受け、その邪を相剋的伝変により独り「囚」期にある蔵が受け止めれば「積」を生じることになる。



- ◆「死」期にある蔵は、最も静かに居られる状況にある。もしそれが病むとすれば、「旺」期にある蔵からの制剋が強いことを意味している。(つまり時気の大過・旺気盛である)



- ◆「囚」期にある蔵は、「旺」期にある蔵が盛んになり過ぎないように見張って、制剋する立場にある。しかし自身に「虚」があれば、時気（旺の気）に侮られて、邪を受けることになりやすい。いわゆる「微邪」である。また、「相」期にある蔵から邪を受け、これを治せないでいると「積」を生じる要因になる。

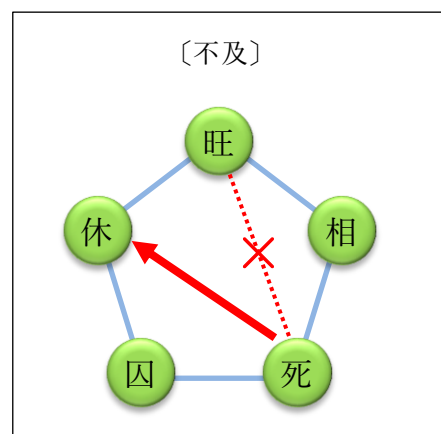
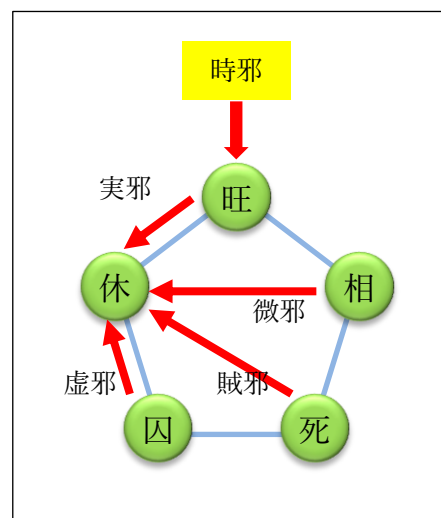


- ◆「休」期にある蔵は邪を受けやすい。それは「旺」期を過ぎたばかりで、盛んに働いた後の消耗の回復が十分とは言えないからである。

「子から来る邪」（つまり「旺」気→「休」蔵）は「実邪」となる。子が親から独立する時には親に背く形になることが多く、消耗している所に心労させられることに例えられる。つまり「腎に木邪」「肝に火邪」「心に土邪」「脾に金邪」「肺に水邪」の関係が生じやすい。

「休」期にある蔵にとって「微邪」となるのは、もともと自分が制剋している位置に相当している「相」の気から冒される場合である。つまり五行的には「侮られ」ているのである。

「休」期にある蔵が「死」の気に冒されるのは、「賊邪」という。「死」の気は「旺」の気から制剋を受けている筈である。しかし「死」の気の為に「休」期にある蔵が病になったということから、「旺」の気が不足であることと、「休」の気がひどく虚していることが分かるのである。



- ・旺不能制死
- ・死妄行乘休而休病

※「休」→「相」・「休」→「死」・「休」→「囚」・「休」→「休」の場合、邪を受けている蔵の背腧穴の反応は他の場合よりもハッキリする。

※「休」の蔵が病んでいて、その状態が他の蔵に邪として影響し、その上、影響されている蔵を外邪が重ねて冒している場合には、募穴や、手足の反応性が強い穴（兪・絡・自）穴にも明瞭な反応を現わす（外邪の五行性に呼応する経と穴）。

